

舞台に立つ子どもたちの学び

校長 相川 保 敏

10月25日の学習発表会には、ご多用中、多数の保護者の皆様にご来校いただきありがとうございました。子どもたちの演技、発表はいかがでしたでしょうか。当日、私はピアノの後方から参観していました。1年生から6年生までの多くの子どもたちが、私の横を通り過ぎたり、待機したりして、本番舞台に向かっていきました。小さい声で「校長先生、緊張するー！」と言って深呼吸をする子や「頑張るね」と目を輝かせている子、何も言わずに心を落ち着かせている子など、子どもたちの姿は様々でした。きっと同じ舞台でも一人ひとりの心に残るものは違うものであると感じました。

さて、本校の学習発表会は、国語、英語、社会、音楽等の合科的、総合的な内容とともに、多くの学校では嫌厭されつつある学芸会の要素を含んでいます。嫌厭される要因として、台本作り、配役決め、舞台指導、舞台準備などに時間を要し、教員の負担が大きいということが一番です。しかし、舞台に立つ子どもたちの姿を見ると、この場でしか学べないことが多々あり、代えがたい教育の場だと考えています。

子どもが舞台に立つということには、単なる発表や演技を超えた深い教育的意義があります。舞台は「学んだことを表現する場」であると同時に、「自分と仲間と社会をつなぐ場」でもあります。本校では、この経験を通して子どもたち一人ひとりの内にある力を引き出し、人としての成長を支えることを大切にしています。

まず、舞台に立つことは、子どもが自分の思考を「形」にする学びです。台詞を覚えるだけではなく、その意味や感情を考え、どう伝えるかを工夫する中で、思考力・判断力・表現力が統合的に育まれます。自分の役割を理解し、演出の意図をくみ取りながら行動することは、まさに主体的・対話的で深い学びの実践そのものと言えます。

また、舞台は「心の教育」の場でもあります。自分のなりたい役、言いたい台詞、演奏したい楽器など、オーディションを経る中で、自分と他者を比較しながら喜びや悔しさ、他者への敬意など様々な感情と向き合います。学校だけでなく家でも何度も練習を重ねて迎える本番では、大勢の人の前に立つ緊張感、練習通りにできるかと

学習発表会プログラム

- 1年 シンデレラ
- 2年 群読～ともだち～
- 3年 Frozen
- 4年 夢から醒めた夢
- 5年 私たちがつくる持続可能な社会
～SDGsをナビにして～
- 6年 未来へつなぐ平和の音～戦後80年に願う～

いう不安感、演技後に観客から送られる拍手や温かい眼差しなど、それらすべてが、子どもたちに達成感と自己肯定感をもたらします。たとえ完璧にできなくても、「自分は最後までやり切った」という体験が、次の挑戦への自信を生み出します。努力が形になる経験は、子どもたちの内面に確かな自尊感情を育てていきます。

さらに、舞台は「共に生きる力」を育む場です。台詞を考える、楽器を演奏する、歌声を響かせる、声を揃える、主役でも脇役でも、舞台ではどの役割も欠かすことができません。互いを認め合い、助け合いながら一つの作品を作り上げる過程は、まさに社会の縮図です。自分だけでなく、仲間の存在によって自分が生かされていることに気づくことは、共生の心を育てる大切な契機となります。

このように、舞台に立つという行為は、「学びの成果の発表」であると同時に、「生きる力の育成」の実践でもあります。言葉・身体・感情を通じて表現することは、自己理解と他者理解を深め、豊かな感性を育てます。舞台で得た自信と感動は、やがて子どもたちが社会に出て自分の考えを堂々と伝える力の礎となるでしょう。

本校では、これからも表現活動を大切にしていこうと考えています。舞台に立つ子どもたちの姿には、日々の学びの積み重ねと、一人ひとりの成長の軌跡が詰まっています。舞台を参観していただいた保護者の方々が「すごく成長したね」「涙が出てきた」などとお話している声を体育館で何度も耳にしました。子どもたち一人ひとりの努力と輝き、そして成長を感じ取っていただけたのだと感謝いたします。